

編 集 後 記

<川 井 啓 市>

いよいよ恒例の学会シーズンに入りますが、あちこちの大学で学園ストが相次ぎ、一部学会の演題にも欠演のありそうな忙しい毎日です。今までの大学の抱えていた矛盾を考えれば、当然の事態が起こってきた感なきにしもあらずですが、早急にこのような問題も解決されて、安心して研究できるよう努力したいと思います。それにしても「胃と腸」の分野では、もはや大学の一部の研究者のみによる研究ではなく、すでに開業しておられる先生方にも根をおろした、豊かな研究の土壌が次第にできてきているのを喜ぶしたいと思います。

今月は「胃と腸」本来の目的の一つでもある小腸疾患の診断を特集としてとりあげました。何といても病態生理の未解決な分野ですが、白壁先生のX線診断、増田先生の腸液、斉藤先生の腸紐、木原先生の小腸生検など、いずれもお得意の分野での豊富な文献的考察と研究内容は、今後の研究のための貴重な方向づけとなりますし、将来の小腸学の一道標になると思います。

また貴重な症例報告や第3回アジア太平洋消化器病学会見聞記(城所)は本邦の胃疾患診断の進歩を如実に示していますし、中山教授らの「胃の巨大皺襞の診断規準」は以前本誌の特集号で扱いましたように、やや主観的に扱われ易い本疾患の診断に客観性を与える意味で注目に値します。

なお本誌がややもすれば時に難かしいなどの声を聞きましたが、本号より新たに「診断の手ほどき」の欄を設けました。「IIc」(市川)が今月のそれであり、また技術解説の「ファイバーガストロスコプの耐久性と長持ちのさせ方」(福地)、「レントゲンスライドの作り方」(堀越)など、実際の臨床に則した幾つかの話題を提供し、それらの御不満に答えたいと思います。

<編集> 早期胃癌研究会